

原爆投下から 75 年 ～「2020 平和行動 in 大分」の日に～

ヒロシマ、ナガサキへの原爆投下から 75 年目を迎えました。未だ核兵器廃絶は実現していません。戦争の惨禍もやんでいません。

そして、新たに「見えない敵」新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、今年の「平和行動 in 大分」が開催されることになりました。

2017 年のノーベル平和賞の授賞式において、広島で被爆されたサーロー節子さんは、その日の講演の中でこのように語りました。

「今日私は皆さんに、この会場において、広島と長崎で非業の死を遂げたすべての人々の存在を感じていただきたいと思います。皆さんに、私たちの上に、そして私たちの周りに、25 万人の魂の大きな固まりを感じ取っていただきたいと思います。

その一人ひとりには名前がありました。一人ひとりが、誰かに愛されていました。彼らの死を無駄にしてはなりません。」

被爆の当事者である節子さんの凄惨な経験とその時の状況を紡ぎだす節子さんの言葉は、その「一言・一言」が非常に重く、核兵器廃絶を求める人たちをはじめ、世界の多くの人々の心に響くものだったと思います。

また、先月 7 月 29 日に広島地裁で「黒い雨訴訟」の判決が下されました。原爆投下後に降った「黒い雨」によって健康被害を受けたにもかかわらず、被爆者健康手帳の交付を受けられないこととは「違法である」とする訴訟の判決は、「原告側の主張を全面的に認め、84 人全員に手帳の交付を命じるもの」でありました。

そして、一人ひとりの被爆者の被爆体験に関する証言とこれまでの間の健康状態を重視し、広く救済するという画期的な内容を含んだ判決と言えます。

この判決は、長崎においても同様の訴訟が行われていることから、「励み」や「弾み」となって、大きな光になるものと思っています。

話は長崎から長野に飛びます。

ある歴史研究者は、「沖縄戦というのは勝ち負けの戦争ではなく、松代大本営ができるのを待つための時間稼ぎの戦争だった」と言っています。

長野県長野市松代地区に「松代大本営跡」という「地下壕」があります。当時日本の政府中枢機能の移転計画は、戦前 1940 年の開戦前からあったようです。それが 1944 年 7 月のサイパン島の陥落以後、「本土爆撃」と「本土決戦」が現実の問題になったことから、急ピッチで長野県松代への「皇居」、「大本営」、その他重要政府機関の移転の工事が急ピッチで進められます。

沖縄戦の戦闘は、1945 年 3 月 26 日に始まり、6 月 23 日に終わるという約 3 か月間ということになっていますが、1945 年 4 月 1 日に米軍が沖縄本島「北谷」「読谷」に上陸し、4 月 2 日から組織的な戦闘が開始されます。

激しい戦闘が繰り返される中、5 月 18 に首里城が陥落します。その段階で沖縄を防衛していた第 32 軍の「牛島満」司令官は、大本営に降伏する旨の連絡をしましたが、大本営は「さらに南に移動して戦いを継続せよ」と命令します。

そのため、第 32 軍は摩文仁の丘を目指して南に下りはじめましたので、当然、一般住民もその後に従うことになります。

歴史に、「～れば、～たら」はありませんが、ここで降伏していれば、十数万人にも及ぶ沖縄住民や現地動員防衛協力隊員の死は避けられていたかもしれません。沖縄南部戦線における「真の悲劇」もなかったか

もしれません。

1945年6月に入ってから、陸軍大臣をはじめ幹部や宮内庁職員が、松代大本營の建設現場の視察を行い、天皇の側近が「ほぼこれでいいだろう」と言って松代を後にするのが6月半ばで、その直後の6月21日に大本營は、沖縄の第32軍に「貴軍の忠誠により本土決戦の準備は完了した」と打電をしました。

司令官である牛島中将は、この打電を受けて、6月23日摩文仁で自決をし、「日本軍による組織的な戦闘」が終了することとなります。

しかし、沖縄南部戦線における「真の悲劇」は、この先もさらに続くこととなります。

戦後75年という時間が過ぎました。

戦争の惨禍の中に生きた人たちには、今の私たち一人ひとりと何も変わらない、日常生活がありました。

そして、寝食を共にする楽しい家族がいました。それぞれの将来を語り合い友達がいました。将来を誓い合った恋人がいました。

みんな、それぞれの未来を思い描きながら、そんな日が必ず来ると信じて生きていました。そんな一人ひとりの命が一方的に奪われていったのが、沖縄戦であり、原爆投下であり、戦争でした。

私は、「生きた時代が違う、ただそれだけのことなのか」とは思うことはできません。

私たちは、大切な誰かを一人失っただけでも、傷つき、時には自分を責めたりもします。この感覚を私たちは大事にしたいと思います。

私たちは、「一人ひとりの命の尊厳」をないがしろにする人たちに対して、真正面から「NO」を突き付けていくことはもちろんのことですが、「命に対する不条理」「人間に対する不条理」に対して、一心不乱にその克服に取り組んでいかなければなりません。

サーロー節子さんは、講演の最後にこのように締めくくっています。

私は13歳の少女だったときに、くすぶるがれきの中に捕らえられながら、前に進み続け、光に向かって動き続けました。

そして生き残りました。今、私たちの光は核兵器禁止条約です。この会場にいるすべての皆さんと、これを聞いている世界中のすべての皆さんに対して、広島の廃虚の中で私が聞いた言葉をくり返したいと思います。

「あきらめるな！（がれきを）押し続けろ！ 動き続けろ！ 光が見えるだろう？そこに向かってはって行け」

私自身も「あきらめる」ことなく、光が見える方に力強く這っていきたいと思います。ともにがんばろう！

(2020年8月1日)



○連合は、「戦後75年」の今年、平和への想いを次世代へつなげる目的で、全国47地方連合会の「次世代を担う若者」が中心となり「希望の旗」の作成をおこないました。詳細につきましては、連合ホームページ「7つの絆 平和運動」をご覧ください。

<https://www.jtuc-rengo.or.jp/activity/kizuna/peace/>

■ 「2020 平和行動 in 大分」の様子

と き : 2020年8月1日(土) 10:00~12:00

と ころ : 大分市・ソレイユ7F



講 師 : 松本 常圃 先生



講 師 : 連合長崎 宮崎 辰弥 会長



挨 拶 : 安達 澄 参議院議員



平和アピール : 青年委員会 東 哲矢 委員長



キャラバン行動決意表明 : 大分地協 矢野 正一 議長



「核兵器廃絶」と「世界の恒久平和」を訴える

平和キャラバンカー (8月中・県内で行動)